



コラム:理工系博士課程修了者の進路について

学校基本調査では博士課程修了者の進路についても統計がとられているが、データの解釈には注意が必要である。

図表 3-3-3 に「理工系博士課程修了者の卒業後の進路」を示す。理工系学部卒業者や理工系修士課程修了者に比べて「その他」の割合が高いことが分かる。ここで「その他」とは学校基本調査における「臨床研修医」、「専修学校・外国の学校等入学者」、「一時的な仕事に就いた者」、「左記以外の者」の和である。「その他」の割合が高い要因として以下の2点が考えられる。

①ポストドクターの進路区分の影響

博士課程卒業後、大学や公的機関でポストドクターとして勤務する者が増えている。一方、学校基本調査における進路区分には、ポストドクターが「就職者」、「一時的な仕事に就いた者」、「左記以外の者」のいずれに対応するかが明記されていない。ポストドクターの雇用形態は多様であり、数カ月単位で雇用されるケースもあることから、ポストドクターの一部が「一時的な仕事に就いた者」や「左記以外の者」に分類されている可能性がある。

②調査実施時点で進路が確定していない卒業者の影響

学部卒業者や修士課程修了者と異なり、博士課程修了者の中にはアカデミックポストを目指す者も多い。企業への就職については、就職活動の時期が概ね決まっているが、アカデミックポストの公募は年間を通じて行われる。この為、アカデミックポストを目指している者の中には、学校基本調査が調査対象としている卒業の次年の5月1日現在で進路が確定していない者が、相当数いると思われる。これらの者については、進学でも就職でもないので、進路が「左記以外の者」に分類されていると考えられる。実際、2010年度の「その他」(1,317人に占める「左記以外の者」)の割合は約7割と最も大きい。

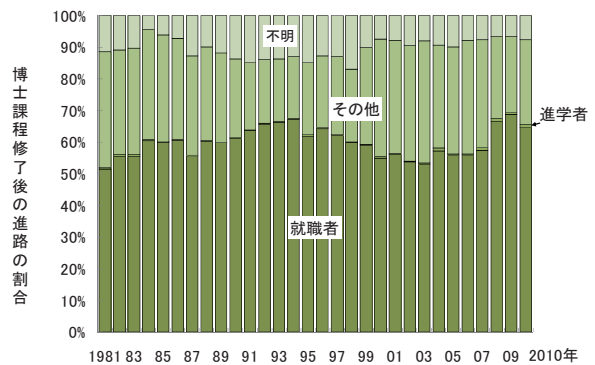
また、進路状況の調査の際に、進路が決まっていない為、調査に回答せず、結果として学校では進路状況が把握できない者(この場合不詳となる)も

一定数存在する可能性がある。

これらから、理工系博士課程修了者の就職割合は過去20年を見ると6割程度であり、「その他」の割合が高いのは、博士課程修了者のキャリアパスの形態が、学部卒業者や修士課程卒業生とは異なっているためと言える。従って、このデータから、例えば博士課程修了者の能力と社会のニーズとのミスマッチがあるので、就職率が6割程度に留まっているというメッセージを出すことは避けるべきである。需要と供給のミスマッチが存在するかについては、米国で行われているように、博士人材のキャリアについての追跡調査を継続的に実施し、博士取得者がどのような職業や産業で就労しているかを分析することが必要であろう。

(伊神 正賢)

【図表 3-3-3】理工系博士課程修了者の卒業後の進路



注:図表 3-3-1と同じ。
資料:文部科学省、「学校基本調査報告書」
参照:表 3-3-3